

インドネシア・ルピアの急落と市場金利の上昇について

2013年8月26日

8月中旬以降、インドネシア・ルピアは大幅に下落し、対ドルでは2009年4月以来の水準に、対円では今年の安値圏にあります。また8月に入り低下に向かうなど落ち着きを示していた市場金利も再び上昇に転じています。政府・中央銀行は断続的に為替市場介入を実施していますが現在のところ効果は限定的となっています。

《急落の背景》

米国QE3(量的緩和第3段階)の早期縮小開始観測が懸念される中、緩和の縮小を警戒する投資家が新興国向けの証券投資を中心とする資本をリスク軽減のため、安全資産に振り替える動きを短期的に強めたこと、さらにはその動きに乗じた思惑による新興国通貨売りが加速したことが挙げられます。

インドネシア・ルピアが大きく売られた要因としては以下のことが考えられます。

①悪化が続く経常収支と外貨準備高の減少

インドネシアでは貿易収支の赤字転換を受けた経常収支の悪化が続いています。6月の貿易赤字は前年同月比で減少しましたが、増加が予想されていた輸出は減少したままで、4～6月期の経常収支の赤字幅は前年同期を大幅に超えました。また同国の外貨準備高は市場介入もあって足元減少を続けています。

②インフレ懸念の強まり

6月下旬、インドネシアでは燃料補助金(燃料価格抑制のための政府による補助金制度)の削減が開始されました。この削減によるインフレ圧力の加速が不安視されていましたが、8月に発表された7月の消費者物価は前年比で8.61%(前月5.90%)と市場予想を上回る大幅な上昇となりました。同中央銀行はインフレターゲット(誘導目標値4.5%±1%)を設けていますが、これを大幅に超える水準となりました。

③経済成長率の鈍化

2013年4～6月期の実質GDP成長率が前年同期比で5.8%と前期の6.0%から一段と鈍化し、インフレ抑制のための利上げも見送らざるを得ない状況となっています。

《景気、為替、市場金利の見通しについて》

景気については、内需が比較的堅調な一方で輸出の減速が目立っています。燃料価格高騰や通貨安による輸入物価の上昇を受けたインフレ率の上昇に加え、6、7月の利上げの影響も広がっています。こうした中、同中央銀行は8月15日の同理事会で政策金利の据え置きを決めました。同時に金融市場オペレーションの強化、長期的な通貨価値の維持、銀行監督制度の導入など、金融市場の安定化策を発表しました。また政府は23日、輸出業者による外貨購入についての規制を緩和しドル流動性の確保を目的とした措置の導入、企業向け税優遇措置の拡大、一部輸入品への増税、鉱物資源の輸出緩和などからなる緊急経済対策を発表しています。なお1997年のアジア通貨危機の再来を危惧する見方方も一部にはありますが、当時と違い同国の経済規模が拡大していること、外貨準備高が大幅に増加していること、チェンマイ・イニシアティブ(東アジア地域における通貨融通制度)などセーフティネットが拡充されていることなどから懸念にはあたらないとの見方が現状では多数派となっています。

景気の悪化が懸念されることから、インドネシア・ルピアはしばらく軟調な展開が続く可能性もありますが、政府・中央銀行はインフレ対策や通貨安に歯止めがかからない場合にはさらなる措置を導入する可能性もあるとみており、時間の経過とともに為替、金利市場は落ち着きを取り戻すと思われます。

- 当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類(目論見書等)ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。
- 当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。
- 当資料の内容は作成日における当社の判断であり、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。
- 投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。

《インドネシア・ルピアの対円推移》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成

《インドネシアの金利の推移》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成